

平成29年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第2年次）（概要）

1 研究開発課題名	水産・海洋資源の持続的利用や六次産業化、グローバルな資源管理やローカルな里海の環境保全の取組等を通して、地域社会をリードし、海洋立国日本の将来を支えるグローバル人材を育成するための先進的かつ汎用的な研究		
2 研究の概要	<p>水産・海洋高校には、時代の変化や新たな価値を主導・創造し、水産及び海洋分野を牽引する、高度な専門的知識と実践力を兼ね備えたグローバル（グローバルな視点でローカルに活躍する）な人材の育成が求められている。そのため、専攻科を含めた水産教育の中で、現行の学習指導要領で改善された3つの観点(1)将来のスペシャリストの育成、(2)地域産業を担う人材の育成、(3)人間性豊かな職業人の育成を踏まえた6つの先進的かつ汎用的な研究開発等に取り組むことで、地域社会をリードし、将来の海洋立国日本を支える人材の育成を目指す。</p> <p>(1) 将来のスペシャリストの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 産学官連携によるクロアワビの完全閉鎖式陸上養殖技術の研究 ② ラジコンマルチコプターによる水質リモートセンシングの研究 ③ 海洋調査等における小型海洋調査用水中ロボットの活用に関する研究 <p>(2) 地域産業を担う人材の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ④ 研究機関や地域産業との協働による新商品開発と六次産業化の研究 ⑤ 大学等の研究機関との連携によるウナギの資源保護と完全養殖化に向けた基礎研究 <p>(3) 人間性豊かな人材の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥ グローバルな視点を身に付けた水産技術者の育成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 連携企業における長期インターンシップ（日本版デュアルシステム）の取組 ・ 水産・海洋関連産業の国際化に対応できるグローバル人材の育成 		
3 平成29年度実施規模	<ul style="list-style-type: none"> ① 海洋資源科及び水産クラブ「増殖部」を対象として実施した。 ② 情報通信科及び水産クラブ「情報技術部」を対象として実施した。 ③ 海洋科学科海洋工学コース及び水産クラブ「海洋工学部」を対象に実施した。 ④ 水産食品科及び水産クラブ「製造部」を対象に実施した。 ⑤ 海洋資源科及び水産クラブ「増殖部」を対象に実施した。 ⑥ 全学科及び全校生徒の中から英語に興味のある生徒や大学等への進学を希望する生徒に文化部「進学研究部」を対象に実施した。 		
4 研究内容	<p>○研究計画</p> <table border="1" data-bbox="183 1655 1409 2076"> <tr> <td data-bbox="183 1655 355 2076">第1年次</td> <td data-bbox="355 1655 1409 2076"> <ul style="list-style-type: none"> ① クロアワビの人工飼料に替わる飼料の研究を行う。 ② マルチコプター（ドローン）の原理や設計について研究するとともに、全日本学生室内飛行ロボットコンテストに出場することで操縦や機体製造等の技術を身に付ける。 ③ 水中ロボットに関する知識や技術に関する基礎研究に取り組むとともに、JAMSTEC主催の大会用機体の設計、製作を行い、大会に出場する。 ④ 地産地消を考慮した、新しい食材を用いた商品開発の研究とイチビキ(株)等との協働によるカガミガイを用いた「魚醬」の研究に取り組む。 ⑤ 雌雄の判別やホルモン投与による雌化の研究及びホルモン注射による雌雄の生殖腺成熟に関する研究に取り組む。 </td> </tr> </table>	第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ① クロアワビの人工飼料に替わる飼料の研究を行う。 ② マルチコプター（ドローン）の原理や設計について研究するとともに、全日本学生室内飛行ロボットコンテストに出場することで操縦や機体製造等の技術を身に付ける。 ③ 水中ロボットに関する知識や技術に関する基礎研究に取り組むとともに、JAMSTEC主催の大会用機体の設計、製作を行い、大会に出場する。 ④ 地産地消を考慮した、新しい食材を用いた商品開発の研究とイチビキ(株)等との協働によるカガミガイを用いた「魚醬」の研究に取り組む。 ⑤ 雌雄の判別やホルモン投与による雌化の研究及びホルモン注射による雌雄の生殖腺成熟に関する研究に取り組む。
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ① クロアワビの人工飼料に替わる飼料の研究を行う。 ② マルチコプター（ドローン）の原理や設計について研究するとともに、全日本学生室内飛行ロボットコンテストに出場することで操縦や機体製造等の技術を身に付ける。 ③ 水中ロボットに関する知識や技術に関する基礎研究に取り組むとともに、JAMSTEC主催の大会用機体の設計、製作を行い、大会に出場する。 ④ 地産地消を考慮した、新しい食材を用いた商品開発の研究とイチビキ(株)等との協働によるカガミガイを用いた「魚醬」の研究に取り組む。 ⑤ 雌雄の判別やホルモン投与による雌化の研究及びホルモン注射による雌雄の生殖腺成熟に関する研究に取り組む。 		

	⑥英語の授業において、スキルアップテスト（マラソンテスト）や週末課題の内容を研究して、生徒全体の基礎学力向上を図る。また上位者については、資格取得や更なる学力向上を図るための特別授業を実施する。また、海外の学校との交流を推進するため、英語による学校紹介Webページの作成に取り組むとともに、人材交流を行うための学校の選定と計画を立案する。
第2年次	①多種アワビの種苗生産に関する餌料生物の培養に取り組む。（ワカメ等を含む） ②自動航行技術の研究及びカメラで撮影した画像の解析について研究する。 ③水中ロボット本体の設計・製作に取り組むとともに、各種大会へ出場する。 ④地域企業との連携により開発した「魚醬」を用いた新しい商品レシピの開発、提案と、地産地消を考慮した新しい食材を用いた商品の研究開発及び試作品の製作を行う。 ⑤採卵からふ化に関する研究に取り組むとともに、シラスウナギの雌化を図る。 ⑥英語の基礎学力向上と、上位者をさらに伸ばすことができるように特別授業等を実施する。また、社会科の授業を通して、交流先の学校や国の文化などを研究して理解を図るとともに、海外の学校との人材交流を実施する。
第3年次	①事業化へ向けての販路開拓と六次産業化の研究に取り組む。 ②三河湾の海洋調査を行い、水質測定やアマモの植生の活性度等の測定をとおしてリモートセンシング技術について研究する。 ③実際の海洋での実用性の検証と機体の改良に取り組むとともに、フィールド調査に取り組み、データを収集する。 ④新商品の知的財産権及び商品化・六次産業化の研究に取り組み、研究成果の発表や報告を行う。 ⑤ウナギの人工ふ化した幼生（ふ化仔魚＝プレプトケファルス）をシラスウナギへと成長させる研究に取り組む。 ⑥社会科の授業において人材交流で知り得た自国文化との差異や問題点をまとめ報告する。また、基礎学力向上と上位者を対象にした特別授業に取り組むとともに、その効果を検証し、まとめる。
第4年次	②マルチバンドカメラや赤外線カメラ等を用いて海洋調査のデータを分析する。 ③実際の海洋での調査を実施し、正確な調査に必要な技術、技能を養うとともにデータを分析考察する力を養う。
第5年次	②海洋調査のデータをまとめ、三河湾の生態系安定の解決策を探るとともに、研究成果の発表や提案を行う。 ③アマモ場の調査を継続して実施し、研究成果をまとめ、発表や報告を行う。

○本年度の教育課程の内容

- ①海洋資源科1年次「水産海洋基礎」、2年次「資源増殖」、3年次「課題研究」で実施した。また、水産クラブ「増殖部」の中でも取り上げた。
- ②情報通信科1年次「水産海洋基礎」、2年次「総合実習」、3年次「課題研究」で実施した。また、水産クラブ「情報技術部」の中でも取り上げた。
- ③海洋科学科海洋工学コース1年次「水産海洋基礎」、2年次「総合実習」、3年次「課題研究」で実施した。また、水産クラブ「海洋工学部」の中でも取り上げた。
- ④水産食品科1年次「水産海洋基礎」、2年次「家庭総合」、3年次「課題研究」で実施した。また、水産クラブ「製造部」の中でも取り上げた。
- ⑤海洋資源科1年次「水産海洋基礎」、2年次「資源増殖」、3年次「課題研究・総合実習」で実施した。また、水産クラブ「増殖部」の中でも取り上げた。
- ⑥全学科「コミュニケーション英語Ⅰ」で実施した。また、文化部「進学研究部」及び授業後の特別授業でも取り上げた。

○具体的な研究事項・活動内容

①産学官連携によるクロアワビの完全閉鎖式陸上養殖技術の研究

アワビは夜間に摂餌行動をとることが確認されているため、飼育水槽を常に暗い状態においてアワビの摂餌や成長に変化が現れるか日照実験を行った。実験水槽と比較し、紫外線照射がアワビに与える影響を調べるため、殻色の変化や、殻長及び体重の計測を行い成長の比較検討を行った。さらに、良い餌を模索するため、飼育しているアワビがコンブを摂餌するかを調べ、嗜好性を模索しながらアワビの生残率を改善し生産性の向上と飼育の安定化を目指した。

②ラジコンマルチコプターによる水質リモートセンシングの研究

ドローン検定協会株式会社が主催する「ドローン検定」を受検した。日本航空宇宙学会主催「全日本学生室内飛行ロボットコンテスト、マルチコプター部門」に参加した。本年度はトリコプター（回転翼が3つの機体）を大会出場校としては初めて製作し、コスト面や機能面について東京大学と連携しながら研究を進めた。リモートセンシング技術を用いて、地上にある物体・物質の面積を上空からの画像から算出する実験や、教師付土地被覆分類法による植生指標（NDVI）を求める解析方法を研究し、水質リモートセンシングの一ケーススタディとして、海上での藻場・アマモ場の面積や活性度を求める手順について研究を進めた。

③海洋調査等における小型海洋調査用水中ロボットの開発

水中ロボコン in JAMSTEC'17 実行委員会主催「水中ロボコン in JAMSTEC17」に出場した。実行委員会より貸与された機体を大会当日までにメンテナンスし、大会に出場できるよう整備を行った。海洋調査研究用として購入した水中ロボット（DEEP TREKKER）の操縦訓練や機能分析を行った。校内プールで淡水における訓練をした後、竹島水族館の屋外水槽を用いての海水訓練を行い、実際の海洋に見立てた訓練を行った。長崎総合科学大学と連携し、風呂用ポンプを推進機関とした自作水中ロボットの製作方法や技術について学んだ。長崎県橘湾において、長崎総合科学大学教授の指導の下、長崎総合科学大学附属高校科学技術部の生徒と合同で、「DEEP TREKKER」による藻場の観測を事例に海洋資源観測訓練も行き、科目「課題研究」のテーマとして役立てた。

④研究機関や地域産業との協働による新商品開発と六次産業化の研究

昨年度開発した魚醤「里海の貝革」を、本年度もイチビキ㈱の協力を得て製造し、愛知県水産活動報告会にて発表を行った。また、高校生アイデアコンテストに応募しプレゼンテーションを行った。さらに、イチビキ㈱、(有)まんてんとの協働でメヒカリを使用した魚醤を開発した。商品名は生徒から募集し「深輝」と決定した。加えて実習船「愛知丸」で釣った魚を利用したジュレ状つくだ煮「愛知丸ごはん」にマグロの種類を追加したり、ヤマサちくわ㈱と協働で、サメの肉を使った練り製品（しゃーはん）を開発した。

⑤大学等の研究機関との連携によるウナギの資源保護と完全養殖化に向けた基礎研究

ウナギの産卵・飼育研究に関する情報の収集を行うとともに、関係する文献調査を行った。本校で飼育したシラスウナギから3～4年後のウナギの生殖腺の形態を調べた。2～3年飼育したウナギを解剖し、内臓に付属している生殖腺を肉眼的に調べて雌雄を確認した。二ホンウナギの人工催熟方法として、雄親魚には市販の胎盤性生殖腺刺激ホルモン（HCG）、雌親魚にはサケ脳下垂体抽出液を使用し、併せてウナギの全長及び体重を測定した。雄親魚には搾出法、雌親魚にはカニューレーション法により採精・採卵を試み、ふ化を実現するための良質な卵を作る研究を進めた。

⑥グローバルな視点を身に付けた水産技術者の育成

海外の高校生とコミュニケーションの土台として英語を用いて相互理解を図るため、インターネット電話サービス「Skype」を利用して、ニュージーランドにある「Waiheke High School」生徒16名とビデオチャットによる生徒間交流をした。英語の「聞く」力の強化を図り、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したりすることを目標に語彙力を高める言語活動を実施した。また、海洋・水産関連産業で活躍できるグローバル人材の育成として、実用英語技能検定を受検させることで、言語教育の育成やコミュニケーション能力の育成を図った。愛知県教育委員会主催「専門高校生海外インターンシッププロジェクト グローバルフードビジネスコース」に本校生徒を参加させ、ベトナム企業やエビ養殖場の見学、現地高校生との交流を行った。グローバル社会における海洋水産専門分野で活躍できる人材育成に着手し、生徒の興味関心を海洋水産専門分野に追究させることで、それがどのように将来海洋水産業に貢献できるかを考えさせた。

5 研究の成果と課題

①産学官連携によるクロアワビの完全閉鎖式陸上養殖技術の研究

自然光が入る状態で飼育したクロアワビで唯一平均肥満度の増加が見られたため、アワビの成長には光が関与していると思われる。マダカアワビの摂餌量の変動は、暗くした状態では摂餌量が増える方向に大きく変動しているのに対し、自然光が入る状態では摂餌量が減る方向に大きく変動した。このことから、光以外のものが影響を与えている可能性があると考えられる。12月現在の生残率は人工海水で54.5%、自然海水で83.7%と人工海水で著しい減少が見られた。研究2年目となり生徒自身が役割分担をして円滑に作業を進められるようになった。教員の指導に従って作業を行うだけでなく、自ら実験方法を考えて取り組み、日々改善点を考えながら情報共有をするなど、積極的に研究に取り組む姿勢がみられるようになった。日々の管理にも細心の注意を払い、丁寧な作業を心掛けるようになった。また、商品化を意識した意見が多く聞かれるようになり、外部へ出荷するためにはどのような点を改善すべきかなど事業化へ向けた意識の変化が感じられた。事業化に向け出来るだけ早くアワビを大きくした方が良いという意識が生徒の中にあり、餌に含まれる栄養素についても積極的に考えられるようになった。

科目「資源増殖」では、人工養殖の技術を確立し、如何に効率的に養殖を行っていくかが重要なポイントとなる。アワビの完全閉鎖式陸上養殖という全国初の試みにおいて、生徒自身が結果を求めて試行錯誤することが、個別の知識・技能の習得だけでなく自発的な探究心や深い学びにつながっていると考えられる。また科目「課題研究」と連携することによって、単一の教科に留まらず教科横断的な幅広い視点で問題解決に取り組むことが可能となり、その成果を発表していくことで、思考力・判断力・表現力の育成にもつながっていると考えられる。今後は、高大連携や地域連携といった外部機関との連携も積極的に取り入れることによって、学びに向かう力や人間性の発展にも役立てていきたい。

②ラジコンマルチコプターによる水質リモートセンシングの研究

ドローン検定協会によって新設された「ドローン検定」を課題研究内で学習し受検した。結果は、受検した生徒9名中、4級に4名、3級に2名が合格することができた。これにより、試行錯誤しながら行ってきた研究に対する一定の評価が得られ、生徒の自信につながったと考えられる。また、日本航空宇宙学会主催「全日本学生室内飛行ロボットコンテスト、マルチコプター部門」に出場した。生徒が設計製作した3枚翼のマルチコプターで挑戦し、第3位とペストパイロット賞を受賞した。東京大学航空宇宙工学科研究室との連携では、ハイレベルな知識や技術に触れることで、生徒は大きな刺激を受けることができた。またコンテスト出場は大学生や高専、専門学校の学生と直接交流ができるため、向上心や知識欲求の向上につながっている。その研究成果のまとめは、各地域研究発表会において多くの賞を受賞した。マルチコプターにて空撮した映像をもとに、ソフトウェア「エリアQ」を使用して面積を算出する実験を行った。衛星リモートセンシングの解析方法から低空リモートセンシングへの活用方法についても研究し、教師付き土地被覆分類法による植生指標（NDVI）を求める解析方法から、海上での藻場・アマモ場の面積や活性度を求める手順について確立した。

情報通信科では船舶通信士を養成するための教育課程が組まれており、無線通信技術を中心とした知識と技術を習得している。マルチコプターの研究は無線通信技術を使った新しい分野であり、科目「水産海洋基礎」や科目「総合実習」で生徒が学んだ事を実践して生かせる場でもある。本研究で課題が見つかり、それらを生徒自身が考え解決していくことによって、思考力・判断力の育成につながると同時に、自発的な探究心や深い学びにもつながっていると考えられる。また科目「課題研究」において研究成果をまとめ各方面で発表することにより、表現力の育成にもつながっている。外部機関との連携は、高度な研究をしているという生徒の自信にもつながり、学びに向かう力や人間性の発展にも役立っているため、今後も積極的に進めていきたい。

③海洋調査等における小型海洋調査用水中ロボットの開発

本年度の大会ではメンテナンス不備という基礎的なスキル不足で好成績を残すことができな

った。今後は機体整備を自力でできるようにしていく必要がある。また、海洋調査研究用として購入した水中ロボット (DEEP TREKKER) の操縦訓練や機能分析を行った結果、「水が濁っているため機体を目視で操縦できない」「水中を目視できないため、機体の位置が把握できない」「水中で藻がプロペラに絡み動きが悪くなる」などの問題点が見つかったことから、水中ロボットの原理や機能について再調査を行い、改良に努める必要がある。今後、これらの問題点に対する改良を行い、海洋調査のケーススタディとして、三河湾沖におけるコウナゴの夏眠場の生態調査等を行い、汎用的な調査法を研究していきたい。

水中ロボットを用いた海洋調査は、海洋生物の生態調査など科目「水産海洋基礎」で学んだ内容をさらに深化させて学べるとともに、科目「総合実習」で学習した工学的な知識と技術を実践的に生かせる研究である。生徒自らが課題解決にあたることにより、学習指導要領の趣旨を踏まえた主体的な深い学びにもつながっている。さらに科目「課題研究」にて研究成果を教科横断的にまとめ、その成果を発表することによって表現力の育成にもつながっていると考える。今後も引き続き、生徒自身が課題解決に取り組むことにより、これらの能力を育成できるよう努めていきたい。

④研究機関や地域産業との協働による新商品開発と六次産業化の研究

開発した魚醤「里海の貝革」に少し改良を加えて製造を行った。昨年度より熟成期間が短かったため醤油の色が薄くろ過時にろ紙が目詰まりが起こり、製造時間がかかるなどの問題が起こった。魚醤は乳酸菌でも発酵が行われるため、何らかの問題が生じ乳酸発酵が上手く行われなかったことが考えられる。生徒は、自ら製作した魚醤をイベントで公開し、多くのメディアに取り上げられたことから、積極的に研究に取り組む姿勢が見られるようになった。地元食材であるメヒカリの頭部や内臓を取り除いた廃棄物である「あら」を(有)まんでんから譲り受け、魚醤を製造した。メヒカリの魚醤は、カガミガイの魚醤「里海の貝革」とは対照的に独特の香りが少ない魚醤となった。今後商業ベースに乗せることを視野に入れ、販路開拓を考えていく。さらに、三河湾の底引き網漁で漁獲され、船上で廃棄されてしまうホシザメの有効利用に着手した。ホシザメのすり身とスケトウダラのすり身を適度に配合することで独特の食感を出すことに成功し、「しゃ～はん～目鮫る星～」と名付け、商品開発を行った。

新商品開発に関する研究では、科目「水産海洋基礎」で学んだ水産関連知識を基礎に、共通科目「家庭総合」で学んだ知識と技術を活用して研究を進めている。従来は教科個別の学びが中心であったが、研究を通して教科横断的に課題解決にあたるのが可能となった。専門的に学んでいることが企業との協働により商品化されていくことは、水産食品科の教育内容を実践的に学ぶ機会となっており、関連企業への就職も含めて専門性を生かした進路実現に大きく貢献している。

⑤大学等の研究機関との連携によるウナギの資源保護と完全養殖化に向けた基礎研究

ウナギに関する文献を調査し、大きく4つに分けて整理した。(1)養殖ウナギはほとんどが雄であることから、如何にして雌親を確保するか。(2)雌親を確保するために女性ホルモン投与により雌ウナギを作出する方法が効果的であるか。(3)人工授精のタイミングを如何にして探し出すか。(4)ふ化仔稚魚に与える飼料を如何に確保するか。これらの課題を一つずつ解決しながら、ウナギの人工種苗生産ができるよう研究を進めた。まず、シラスウナギに女性ホルモンを投与することで比較的簡単に雌化させることに成功した。さらに良質な受精卵を得るためには、卵の成熟状態が最良のタイミングで排卵誘発処理を行う必要がある。成熟した雌親魚からカニューレションなどによって採取した卵巣卵を、卵径の大きさや油球の大きさ・数などから推察して、卵成熟の各ステージを判断したが、観察した卵は未熟卵や過熟卵で、排卵間近において受精可能なステージの卵を確認することができなかった。

本研究もアワビの陸上養殖研究と同様、科目「資源増殖」の中で取り組んでおり、人工養殖技術と効率的な養殖方法の確立が目標となっている。まだ結論が出ていない新しい研究に従事し、生徒自らが答えを見つけていくことで自発的な探究心や深い学びにつながっていると考えられる。また科目「36 課題研究」との連携により、他学科との横断的な幅広い視点で問題解決にあた

ることが可能となっている。展示会への出展や研究発表を通じて成果を報告する取組に、生徒が自ら携わることで表現力の育成にもつながっている。今後も外部機関との連携を積極的に取り入れ、学びに向かう力や人間性の発展にも役立てていきたいと考える。

⑥グローバルな視点を身に付けた水産技術者の育成

「Waiheke High School」と「Skype」を利用したビデオチャットによる生徒間交流をスムーズに行うために事前指導を複数回行った。はじめに、ニュージーランドに関するプリントを作成し、文化や場所など基礎的な知識を身に付けさせた。続いて、日本文化や日常生活について「Waiheke High School」の生徒に伝えたいこと、彼らに聞きたいことをプリントにまとめ英文で書かせた。そして、その英文を正しく発音できるよう、一人ずつ教員が発音チェックし練習を重ねた。ビデオチャット交流1回目では、「Waiheke High School」の生徒が校舎を案内してくれた。その後、本校生徒からの自己紹介や質問を行い、交流を進めた。「Waiheke High School」の生徒から日本文化について知りたいという意見が出たため、茶道を紹介する約束をして終了した。2回目の交流では、最初に茶道部の生徒がお手前を見せ、「Waiheke High School」の生徒はとても興味深く見ていた。その後は、自己紹介と相手への質問を行い、交流を進めることで相互理解へとつながった。終了後、本校生徒に対してアンケートを行ったところ、「楽しく交流できた」 そう思う・ややそう思うが95%、「今後もこのような機会があるといいと思う」 そう思う・ややそう思うが95%と、ほとんどの生徒が肯定的な意見であった。はじめは初対面の相手と英語で話すことに緊張感が漂っていたが、アニメなど共通理解できる内容を通して徐々に打ち解け合い、積極的に質問をしたりジェスチャーで興味を示したりするなど、交流を楽しむことができた。英語に対して苦手意識の強い生徒が多いが、自分の発した英語が相手に伝わることで大きな自信となり、苦手意識の克服につながっている。アンケート結果の通り、ほとんどの生徒が交流を楽しみ、異文化を身近に感じることができた。

実用英語技能検定では、2級に合格した生徒が1名、準2級に合格者した生徒が4名であった。ペアワークを実施し相手が答えることで質問者自身のやる気を促し、互いが高め合う雰囲気が生まれた。「自分は英検とは程遠い」と感じていた多くの生徒に、同級生が合格することでやればできるのだという意識が芽生えてきた。授業内の言語活動も目標が明らかなので積極的になった。

海外インターンシッププロジェクトでは、ベトナムの食品スーパーマーケットなどでビジネスについて深く学び、生産、加工、流通までの流れについて、日本との違いに触れることができた。また、農場やエビの養殖場見学を通し、ベトナムにおける農林水産業を直に体験することができ、さまざまなベトナム文化に触れることで異文化理解につながった。参加生徒は、インターンシップを通して事前準備の段階から積極的に仲間と交流し、ベトナムで必要となる英語を積極的に学ぼうとするなど、主体的に学ぶ意識が高まった。将来、海外チームとの連携が必要な深海魚の分野で世界をまたにかけた研究者になりたいという夢を明確にもった生徒もおり、グローバルな視野をもった水産・海洋関連産業の人材となる土台を築けたと考えている。

今後は、英語科に加え社会科も交えながらグローバルな人材育成に努めていく。また、実用英語技能検定の合格だけでなく、専攻科進学後に取得する海技士免許や総合無線通信士免許など、英語科目のある国家資格取得につながる人材育成を進めていきたい。

本校で取り組んでいる各研究成果は、学校ホームページに随時掲載するとともに、学校見学会や授業見学会、SPH 成果発表会等において、関連企業や関連大学、市内中学、県内高等学校、保護者や地域の方々に広く普及している。また、全国海洋・水産系高等学校生徒研究発表大会をはじめ、愛知の水産研究活動報告会、愛知県専門高等学校生徒研究文など、多くの大会等で生徒による発表を行っている。また、全国産業教育フェアをなどのイベントにおいても、研究内容と成果を中心とした展示を行うなどしている。本年度も多くのメディアから取材を受け、「クロアワビの陸上養殖の特集」、「愛知丸ごはん の紹介」、「卒業生が就職した企業との協働による商品開発」、「学園祭での魚醬販売」など、研究の取組について紹介していただいた。今後も研究発表をはじめ、さまざまな面から研究成果を多くの方々に知ってもらえるよう努めていきたい。